

わたしの教えは、自分の教えではなく、  
わたしをお遣わしになった方かたの教えである。(16)

## ヨハネによる福音書 7章 10～24 節

「濁った目でなく、澄んだ目で」



イエスは神殿の境内のぼに上いって行って、教え始められた。(14)

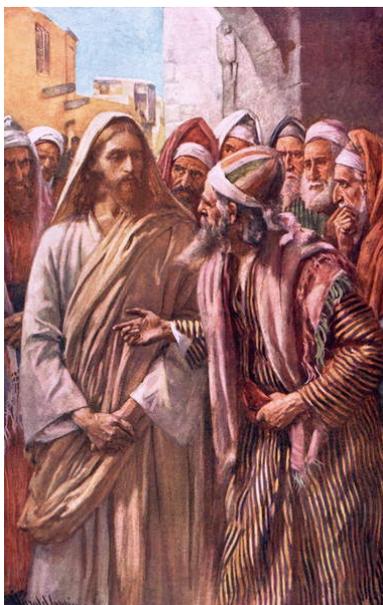
この方かたの御心みこころを行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。(17)

王様の家に、4人の息子たちむすこがいました。四人はそれぞれ、どんな知識を究めるべきか、互いに論じ合っていました。そんなある日、一つの結論に達しました。「地を巡って、最高の知識を得てこよう」。そう言って、再会する場所を決めた後のち、彼らは各自、四方に散っていきました。

.....

と、そのときです。彼らの目の前に立ち現われたのは いったい、何だったでしょうか。それは、恐ろしい形相ぎょうそうで口を開け、鋭い歯を剥き出しにしたライオンでした。ライオンはその獰猛な本性どうもうほんしょうを露わにし、鬣たてがみを振り乱しながら、爪を剥いて四人に飛びかかりました。そして、無慈悲にも、四人を一人残らず殺してしまいました。こうして、ライオンは命をくれた恩人を亡き者にし、意気揚々と、ジャングルの中へと消えていったのです。

— 古代インドの言い伝えより



この人は、学問をしたわけでもないのに、  
どうして 聖書をこんなによく知っているのだろう。(15)

自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。しかし、自分をお遣わしになった方かたの栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない。(18)

うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。(24)

ひとは世界にたいして 二つのことになった態度をとる。それにもとづいて 世界は二つとなる。

ひとの態度は、そのひとが語る根源語の二つのことになった性質にもとづいて、二つとなる。・・・

根源語の一つは われーなんじ であり、他は われーそれ である。ただし、この場合、それのかわりに、かれ、あるいはかの女という言葉を使っても、根源語にかわりはない。

われーなんじ におけるわれと、われーそれ におけるわれとは、たとえ言葉は同じでも、意味するところはまったく違っている・・・。

われーなんじ という根源語は、全人格を傾倒してはじめて語るができる。

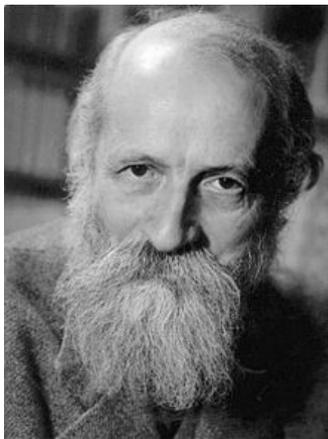
われーそれ という根源語は、全人格を傾倒して語るができない。

マルティン・ブーバー

1878～1965年

オーストリア生まれのユダヤ人哲学者、社会学者。

ユダヤ教に通じ、その著『我と汝』は今なお、不朽の名著として知られる。



その思想は時代を越え、切ったら 切り口からドクドク血の出るほど劇しい生命力をもって 今日に生きている。

— 『われ なんじ 我と汝』の帯より

神学生 でも、退院したら、いろんな楽しみが待ってるってこともありますよね。  
患者 待ってるもんなんか、何もないさ。楽しいことなんか何もないし、誰も待ってやしない。待ってるのは、忙しい仕事だけ。それだけさ。  
神学生 忙しい仕事だけですか。  
患者 そう、仕事だけさ。

— 手術前の一患者と 見舞いに訪れた神学生との会話より